台風10号・11号

災害発生日●平成16年7月29日～8月6日
主な被災地●近畿・四国地方

相次ぐ台風上陸で被害拡大 長引く豪雨で土砂災害が続出

真夏に日本に上陸した台風10号、11号は、通常のコースとは違い、東から西へと進み、四国を横断しながら激しい風雨をもたらした。雨は激しく長く続き、土砂崩れ、浸水、道路の寸断が相次いだ。吉野川水系では池田観測所で危険水位を突破、堤防決壊には至らなかったものの、堤防強化の必要性を見せつけた。人的被害は死者3人、負傷者19人。住家被害は全壊11棟、半壊22棟、一部破損61棟。

超低速で進んだ台風10号 通過後も長引いた豪雨

台風は普通、日本の南西から北東に向かって、列島に沿うように進む。だが台風10号は、南東から北西に向かって、ちょうど日本列島を横切るように進んだ。高知県西部に上陸したのは7月31日16時過ぎ。これにより四国各地で記録的な豪雨が発生。大規模な山腹崩壊によって道路が寸断され、集落が孤立。生活基盤がズタズタになった。

甚大な被害をもたらしたのは、通過した後も延々と続いた強い雨である。雨は7月30日から8月2日の4日間にわたって降り続け、総雨量は徳島県、高知県で1000mm以上、多いところでは2000mmに達した。これは、平年の同時期の月間雨量の3倍から6倍にあたる。原因としては、日本海側に高気圧があったため時速10kmという超低速で進んだことと、8月1日に日本海に抜けて熱帯低気圧になった後も南からの湿った空気が大量に流れ込んだことが挙げられる。

台風10号が上陸した高知県では、中村市が雨の「時間差攻撃」を受ける格好となった。7月31日の上陸時は風雨がほとんどなかったのに、通り抜けた後の8月2日に豪雨に見舞われたのである。同市では2日の深夜0時からの3時間で260mmを超える雨が降り、市街中心部で床上・床下浸水が続出した。同県ではほかにも、宿毛市で国道56号が冠水、押ノ川地区で土砂崩壊が発生し、大豊

▲台風11号による相野谷川の浸水被害（紀宝町高岡地区）〔写真提供／三重県紀宝町〕

▼台風10号による土石流で埋まった住宅（徳島県上那賀町）〔写真提供／朝日新聞社〕

町では国道32号が崩壊して通行止めになった。この国道32号不通に対しては、迂回路として高速道路を無料で通行可能とする措置が79時間実施された。

最も被害が大きかったのは徳島県だ。神山町では、日雨量が588mmと観測史上最高（気象庁）となり、7月30日の降りはじめから8月2日の18時までの雨量が1241mmという異常な大雨を記録した。その結果、川は濁流となり家屋は浸水、道路は橋の流失や土砂崩壊により寸断された。

木沢村では、坂州地区で住宅が土砂に流され高齢者の夫婦が行方不明となり、名古ノ瀬地区でも住民167人が浸水家屋などに取り残された。木沢村の四季美谷温泉では、道路が寸断されたことにより観光客らが孤立した。また、上那賀町白石地区では土石流により7棟が全半壊、43世帯106人が避難勧告を受けて避難した。

被害は四国以外にも広がり、広島県では土砂災害の恐れから237世帯、710人に避難勧告が出された。

河川の増水も著しく、吉野川は池田観測所で危険水位（8.15m）を41cm超えたほか、那賀川、中筋川などでは警戒水位を1m以上超え、決壊こそしなかったが、薄氷を踏むような状態だった。

▲台風10号による徳島県木沢村の山腹崩壊〔写真提供／読売新聞社〕

日本近海で突如発生した台風11号が連続で上陸

台風10号が去るのと入れ替わるようにやって来たのが台風11号である。和歌山県の潮岬の南南東300kmの海上にあった熱帯低気圧が台風に変わり、8月4日、徳島県阿南市付近に上陸した。熱帯低気圧がすぐに台風に発達したのは、2004年は例年よりも日本付近の海面水温が高く、海面からの水蒸気の供給を受けやすかったからと考えられている。

台風11号は四国を縦断した後、兵庫県を通過、8月5日には熱帯低気圧に戻ったが、台風10号の時と同様、南から暖かく湿った空気が流れ込み、激しい雨を降らせた。

奈良県の上北山村では、8月4日の深夜0時から5日の16時までに総雨量731mmを記録、平年8月の月間雨量の1.8倍に達した。そのため北山川が増水、隣接の和歌山県に入って熊野川支流の相野谷川を氾濫させたほか、熊野川と赤木川が合流する熊野川町日足地区では堤防を越え、家屋が浸水する被害が出た。